

武田ミキ先生のお側にお仕えして

平田 富美江

十二月二十七日朝八時、登根先生からの電話を受けて武田ミキ先生の訃報を知り、驚いた私は、取るものも取りあえず家を飛び出して車を走らせました。旧国道から上原橋の袂を横切り土手を走ると、間もなく武田学園が一望できます。緊張の糸が悲しみのためにきれてしまった私は、先生のお側にたどりつくまで流れ出る涙を押さえることができませんでした。

先生は、平素と少しもお変わりなく、静かにベッドにやすまれておりました。しかし、何度も先生をお呼びする私に応えては下さいませんでした。そつと先生の肌にもふれさせて頂くと、そのふくよかなこと、まだ暖かく、安らかな中にも威厳を備えられ静かなお姿、今にも寝息が聞こえてくるようで、現実をそのまま信じることはなかなかできません。前夜まで食事を美味しくお摂りになったと聞きますとなおのことです。

私は、縁あって至らない私ですが、先生のお側で永年仕事をさせて頂きました。それは、私の両親との暮らしに倍した年月です。その間、一度も化粧をなさったお顔をお見せになりませんでした。私はそのお顔の口元にそつと口紅を差させて頂きました。

かえりみますと先生は、平成四年の春、かぜを拗らせられて、安佐市民病院に入院されました。ある時ご様子を伺いに参りますと、先生は車椅子に腰をかけられ、外の景色を眺めておられました。先生には思い出多い、掛け替えのない地であつただけに、それはまた思い出されることも多かつたのではないのでしょうか。

暫くして先生は、「平田さん、何か書くものがありますか。」と「手帳ならあります。」「それでよろしい、出して下さい。」「はい。」「今から私の言うことを書いて下さい。」「はい。」「教育に生き、教育に死する信念をもって七十二年。これからも頑張ります。武田ミキ。」私は粗末な手帳の一頁に、それを書き取りました。「先生、書きました。」「それでよろしい。」一息お入れになって、「平田さん、私にはまだ仕事が残っている。どうしても、それを果たさなければ死ぬ訳にはゆかない、頑張るからね。」と、先生の教育に対する熱意に圧倒された私は、「先生、私も頑張ります。」「ありがとう。」先生のお言葉でした。

先生は教育に一生を捧げてこれらたお方、お側に仕えて参りました私どもは、先生のその心意気に励まされ、またその厳しさに途惑うことも度々でした。

覚書のための手帳は、先生の魂が刻み込まれたようで、今では肌身離さず持ち歩く貴重な手帳となつてしまいました。

その年の六月、私も体調を崩して安佐市民病院に入院する羽目になってしまいました。その時、まだ先生は療養中の身でありましたが、私の体をとて気遣つて下さり、私を知る人が、先生のお見舞いに行かれると、私のことが話題となり、「平田さんがかわいそうだ。」と言って下さっていたそうです。ご自身が病いに臥つておられますのに……私はまことにありがたく聞き、感謝、また感謝でいっぱいです。先生には、公、私とも心から相談にのつ

四、ミキ先生とともに生きて

て頂き、大変お忙しい御身ですのに、ご迷惑のかけ通しで今日に至りました。私が今日あるのも、先生のご指導の賜物と感謝いたしております。

その後の私は、患部は手術で除去されて、健康を取り戻し、病気の再発もなく一年と半年を過ごして参りました。先生はあるとき、「平田さん、無罪放免をするから、これからは細く、長くの精神で暮らさない。」と言って下さいました。どこまでも私の体を気遣つての先生の深い思いやりに涙し、私は先生がいらっしゃる間はお側で頑張りたい、と心に決めました。行き届いた心配りと、溢れるばかりの愛情を先生から頂いたご恩は決して忘れません。九十二才といえ、天寿を全うされた筈です。しかも先生は時間を大変大切にされました。寝食の時間も惜しまれ、早朝より深夜に至るまで教育一筋にその費やされた時間は人々の数倍に値するものだったと思われまふ。その功績はまことに偉大です。それを考えますとき、先生には安らかに、安らかにおやすみ下さいと申し上げなければなりません。しかし、私には予期せぬ別れです。まだまだお側にいて、叱咤激励を受けながらお手伝いをさせて頂けるものと思つておりましたのに、その願いが叶えられず、残念でなりません。その上、先生のご恩に報いることが何一つできなかつたことが悔やまれます。

先生、不束者の私をどうぞお許し下さい。永い間ありがとうございました。今後も先生に倣つて精進いたします。見守つて下さい。重ねて御礼申し上げます。ありがとうございます。

先生の総てを投げだされて創設されました武田学園は益々、隆々と栄えてゆくことを信じます。先生、永い間ご苦勞様でした。どうぞ安らかにおやすみ下さい。